

まんだら通信

第 165 号 (通巻 197 号)

平成 22 年 (2010) 03 月 佛誕 2576 年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

弘法大師 空海

私たちの真言宗をお開きになったお大師さまは、**承和 2 年 (835 年)** 3 月 21 日、おん年 62 歳で高野山奥の院にご入定されました。**宝龜 5 年 (774)** 6 月 15 日、香川県善通寺市の豪族佐伯直田公のお子としてお生まれになり、一族の期待を背に 18 歳で都の大学に進みました。

その頃の大学は国の官吏になるための学問を教えるところで、四書五経つまり中国の思想・哲学が主でしたが、お大師さまはそのような、立身出世という、自分と一族の栄華を求めるといふ行き方は、自分の学ぶべきことではなく、総ての人を救うことが出来るのは仏教以外にはない、この思いから 24 歳の時「聾鼓指帰」といふ、仏教こそ最高の教えであるという論文をお書きになり、自ら出家してしまいます。そのころは、朝廷の許可のない出家は『私度僧』といって、公式には認められていませんでした。

実は、大学をお辞めになり延暦 23 年 (804 年)、留学生として遣唐使船に乗るまでの七、八年間、どこでどのような修行をなさっていたか、詳しいことをおっしゃって

いないのだそうです。

後の断片的なお話から想像すると、吉野や熊野のような、人も行けないような山奥、石鎚山や室戸岬など、断崖の上や洞穴で、来る日も来る日も呪文を唱え続けるなどの修行をなさいます。

またお経を読み解く勉強や、中国語やインドの文字サンスクリットの読み書き、書道その他は、非公式に奈良のお寺で身に付けたのではないのでしょうか。

その頃の都の奈良は、今想像する以上に国際的な都市だったと思います。例えば東大寺の大仏さまの開眼供養のお導師は、記録によると『婆羅門僧正』(ボーディ・セーナ)といつて南インド出身で、音楽の演奏家、絵師、彫刻家、建築家、デザイナーその他諸々の外国人たちも大勢来ていた筈ですね。

幼い頃から『神童』の名をほしいままにした、才能豊かなお方ですから、精力的に最先端の知識を身に付け、それなりの悟りを得たことは間違いないでしょう。

然し、どうしてもまだ納得することができませんでした。

子供じみていますが、私は電車の先頭車両の、前の景色が見えるところが好きです。運転手さんは、出発の時に「しゅっぱつ、しんこう！」といいながら、人差し指を突き出します

ね。

プラットホームでも駅員さんが同じことをしています。『指差確認』というのだそうです。自動車教習所でも同じことを学びます。言葉だけでなく身体も使うことで、より間違いが少なくなるからですね。

真言宗のお坊さんはお経を読む前に、法衣の右の袖の中や袈裟の下で印を結んで

何やら呪文(真言)を唱えます。これは『護身法』といつて、自分とその場所を清める方法ですが、これも言葉と身体を動員して心で確認しているのです。

お大師さまの目指す仏教は、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚という「総ての感覚を動員して、身体ごと(頭ではなく)仏様の世界と一体になる」ことです。この仏教を受け継いでいる指導者がいない日本では、当たり前ですが答えは出ません。

これを密教といいますが、「長安に行けば、青龍寺の恵果阿闍梨という第一人者がいるよ」と、お聞きになったはずですよ。

その答えを求めて、その頃の世界で一番の国際都市といわれた長安、現在の西安を目指して唐(中国)に渡ります。

恵果阿闍梨は「良く来た良く来た。あなたが訪ねてくるのを、今日か明日かと待ち焦がれていたのです。すぐに私が受け継いだ正当な法流を受けましょう」といって、数千人のお弟子を差し置いて、会ったばかりの新参者のお大師さまに、密教の奥義を余すところなくお伝えになり、「私の余命はもう僅かであるから、早く故国に帰って、この類い稀な素晴らしい教えを広めるように」とお示しになりました。

恵果阿闍梨はこののち間もなく遷化されますが、大勢の先輩に推されて、お大師さまが追悼の碑文起草されました。

帰朝後のお大師さまは、書道では『日本三名筆』の一人であり、満濃池の修築を成功させて農民を安心させ、綜藝種智院という完全給費制の庶民のための学校を作り、高野山を創設するなど、それこそ夜を日に繼いでの活躍をされました。

あれから千二百年余り、お大師さまに会うために、四国八十八ヶ所の霊場を巡る人たちは毎年 30 万人といわれています。

懐の広さでは、余人の遠く及ぶところではない何よりの証拠ですね。正にスーパーヒーローといつて間違いではありません。

◆三月、弥生は旧暦の 3 月だそうですが、如何にも春を思わせる響きが好みます。それにしても、今日の日中の気温は 6℃。先月の今日は 15℃でしたから、地球が暖かくなっているなんて本当かいなと思ってしまう。
◆上のお大師さまのお像は、以前ご紹介したと思いますが、縦 65×横 57 センチで東京の田治見美代子さんが、ご丁寧に額装して送ってくださった、当山の寺宝というべき立派なものです。
◆今月の発行部数は郵送分 540。3 区の区長さんをお願いする地元分 495。合わせて 1,035 部になります。

◆近ごろは本を買う時、座ったままでこと足りる、インターネット本屋さんを使うことが多いのですが、書名を書いてボンとキーをたたくと「こんな本も一緒に如何でしょうか」と画面に現れます。町の本屋さんも工夫しないと負けてしまいますね。
◆政府は「公約で国民の皆様は約束しましたから」と、国債という借金で“農家個別補償”や“子供手当”などを配ろうとしています。その返済は、その子や孫が負担することになるでしょう。また、公約に伏せておいた、外国人地方参政権や夫婦別姓を法律にしようとしていますね。それは良いことだと、私たちは

思いがちですが、ヨーロッパの“先進国”ではこういう法律のおかげで、“郷に入って郷に従わない”外国人がなだれ込んで、元々の国民が逃げ出そうか、という悲惨な有り様だそうです。そんなことは知らなかった、ではすまない話ですね。
◆ツクシを取り上げたのは初めてです。言うまでもなくツクシは、とくさ科トクサ属のスギナの花？ですね。まだ寒い明け暮れでも、ツクシを見ると春近しを思えます。開ききると薄緑の胞子が飛び出しますが、顕微鏡で覗くと胞子から生えている糸が湿度によって、生き物のように動いて不思議です。 10.03.09 龍渉



余滴

につぼん人情小噺

第五十一話 母ザル

先日、機会がありまして、宮崎の「かあさんの家」というところに参りました。

ここは、いわゆる「看取りの家」で、お年寄りたちの「終の住処」でございます。

末期がんや、老衰などで、これ以上病院で治療ができなくなった人たちが、「家に帰りたい」と言つた時、いつでも帰れる普通の家を用意しておいてあげようと、ホームホスピス宮崎の市原美穂さんが、一軒家を借りてつくつた小さな施設です。

なぜならご自宅があつたとしても、病気で、しかも、ひとり暮らしのお年寄りでは生きてはいけない。「かあさんの家」に入れば、ヘルパーが常駐し、医師が往診に来てくれる。それよりなにより、応接間では笑い声が聞こえ、テレビの番組が流れているなど、「つねに人の氣配がする」ことで、自分の家にいるのと同じ感覚で最期の時間を過ごせるからです。市原さんは、こうした家を市内に三軒ほど借りています。

「かあさんの家」の襖や障子で仕切られた各部屋には、お年寄りが住んでいます、私がかがった時には、六人のお年寄りがいらつしやいました。

そのなかに、世界的に有名な三戸サツエさんがいました。なんと、九十五歳のおばあちゃんです。この方、なぜ有名かと言いますと、宮崎県の幸島というところで、数十年にわたつてサルの観察を続けられ、「猿が海の水で芋を洗う」ということを発見したからです。これは「百匹目のサル」として話題になり、サルも進化していることを証明いたしました。

三戸さんは長い間、小学校の先生でしたが、自分の家の近くの島にサルがいることを知り、それから時間があるかぎり観察したのだそうです。

今日は、そのなかの話をひとつだけ、紹介しましょう。

幸島では毎年六月から八月にかけて、次々と子ザルが誕生します。サルの赤ちゃんは生まれてすぐに、四本の手足でしっかりと母の胸の毛をつかんで離さないんだそうですね。相当な握力を生まれつき持っているんですよ。ですから、母ザルも赤ん坊のサルをぶらさげたまま

平気で木から木へと飛び移ったりします。そうした母ザルのなかに、赤ちゃんに死なれたウツボというサルがいました。

銀色に近い毛をしたウツボは小柄ですが、メスザルのボスでした。

ある日、ウツボは死んでぐつたりとしたわが子を胸に抱きかかえて、浜辺に出てきました。

いつもの年ですと、死んだ赤ん坊は雨にあたり、腐りはじめるので、母ザルは死んだ子ザルをやむを得ず捨てるのですが、その年は日照りのために腐りません。ですから、赤ん坊は日がたつにつれて乾燥していききました。

三週間たつと、ウツボの赤ちゃんはとうとう干物のようになってしまいました。それでも、ミイラの我が子を抱いてウツボは毎日山から下りてきました。日中は日陰の涼しい岩の上で、ミイラの赤ちゃんに何か話しかけているように見えました。「他の子ザルはどんどん大きくなるのに、何故あなたは小さいままなの？」とでも言っているようでした。

ミイラはしなびてどんどん小さくなりますが、ウツボにはどちらが頭でどちらがお尻か分かるようです。さかさまに持つことは決してありませんでした、赤ん坊が死んで五十二日目。ミイラは、とうとうちぎれて半分になりました。

すると、ウツボは大きいほうの上半身を持ち歩きはじめました。

それから一週間後、餌のとりあいから、サルたちが大喧嘩をはじめました。ウツボは喧嘩の仲裁に入り、砂浜から森へと走りまわっていました。しばらくすると、森は静かになり、仲直りしたサルたちを連れて森へ帰っていききました。

その時です。ウツボは、自分がミイラを手にかけていないことにハッと気づいたのです。

眼の色を変えて探しています。あちら

の木、こちらの岩陰と必死で覗き込んでいるのです。あたりに夕闇が迫り、ほかのサルたちがボスザルに連れられて戻っていつても、ウツボは暗くなるまで探したのです。

ミイラは三戸さんが岩陰から探し出し、岩の上に置いておいたそうです。翌日、わが子を見つけたウツボは、大事そうにミイラの上半身を抱えると、森の中に消えました。こうしてウツボは、死んだ子を五十九日間も大切に抱きかかえていたのです。

話はこれだけでは、終わりませんでした。

この話を三戸さんは、本にしました。すると、ある少女から手紙が届きました。

「三戸先生のウツボの話を読んで、涙が止まりませんでした。私にはお母さんがいません。離婚して、お母さんは家を出ていったのです。そんなことがあつて、中学に入ってからグレて、非行を重ね、自殺を図つたこともありました。私を捨てたお母さんが憎かったからです。でも、ウツボが死んだわが子を抱きかかえて歩く姿にお母さんが重なり、まだ小さかった私を連れていけなかったお母さんは、私よりもつと辛かったにちがいない、と思えるようになりました、いまでは、私は真面目になり、年をとつたおばあさんを助けています」

ウツボという母ザルが、ひとりの少女を救つたのです。

読者の皆さんのなかに、小学校や中学校の先生方がいらしたら、ぜひ、生徒さんに三戸さんのお書きになった『幸島のサル 25年間の観察記録』（ポプラ社）を読ませてあげてくださいな。

反省だけならサルでもできる、と言いますが、反省するのは人間のほうかもしれませんから。

今月号の月刊誌『M.O.K.U』から、編集部と筆者三遊亭鳳豊師匠のご好意で転載させて戴きました。